

プリュダンスの独り芝居（アルマンをマルグリットへ紹介する場面）

【戯曲 第七景】より

【戯曲 第六景】より

アンタン町九番地のマルグリットの家      アンタン町九番地のマルグリットの家

M（マルグリット）

P（プリュダンス）

A（アルマン）

G（ガストン）

G「（丁寧に）ご機嫌いかがですか？」

M「（丁寧に）ありがとうございます。大変によろしい方で。（アルマンへ）あなた様は？」

P「（マルグリットへ）まあ、なんてご丁寧な言葉遣いなのでしょう」

M「ガストンさんは社交界の方にお成りになったのよ」

P「マルグリットさん、ご紹介するわ。この方、アルマン・デュヴァールさんです」

—— アルマン、マルグリット互いにお辞儀をする。

P「パリ中の殿方のうちで一番あなたにご執心な方よ」

M「（プリュダンスに）二人前お料理を追加するように言って頂戴ね。だって、アルマンさんがいくらあたしを愛してくださったって、一緒にお食事をして頂けない筈はありませんもの」

—— マルグリット、アルマンに手を差し伸べる。アルマン接吻する。

G「アルマンはあなたに対して一方ならぬ愛を捧げているのですよ。ねえ、そうですね、プリュダンス？」

P「何でございますって」

—— Mは窓から向かいのPを呼ぶ。（窓同士が向き合っていて真ん中に庭がある造り）

M「プリュダンスさん」

P「（戸外から）来たわよ」

M「どうして来れなかったの、帰っていたのに」

P「来られなかったのよ」

M「何か用があったの？」

P「だってうちに二人若い人が来ているのよ。一緒に食事をしようと仰ってくれるの」

M「じゃあいいわ、その人たちも連れていらっしゃいよ、ここで一緒に食事をしましょうよ。その人たちの名前はなんていうの？」

P「ひとりはおんたも知っているわ、ガストン・リュウ」

M「ええ、知っているわ。で、もう一人は？」

P「ガストンさんのお友達」

M「それならいいわ。じゃ、直ぐいらっしゃいね……」

A（独白）『私は体が震えていました。この訪問が何だか自分の一生に大きな影響をもたらすような気がしたのです』

G「（丁寧に） ご機嫌いかがですか？」

M「（丁寧に） ありがとうございます。大変によろしい方で。（アルマンへ） あなた様は？」

P「（マルグリットへ） まあ、なんてご丁寧な言葉遣いなんでしょう」

M「ガストンさんは社交界の方にお成りになったのよ」

P「マルグリットさん、ご紹介するわ。この方、アルマン・デュヴァールさんです」

—— アルマン、マルグリット互いにお辞儀をする。

P「パリ中の殿方のうちで一番あなたにご執心な方よ」

M「（プリュダンスに） 二人前お料理を追加するように言って頂戴ね。だって、アルマンさんがいくらあたしを愛してくださったって、一緒にお食事をして頂けない筈はありませんもの」

—— マルグリット、アルマンに手を差し伸べる。アルマン接吻する。

G「アルマンはあなたに対して一方ならぬ愛を捧げているのですよ。ねえ、そうですね、プリュダンス？」

P「何でございますって」

G「マルグリットさんに夢中になっていると、マルグリットさんに言ったのさ。」

P「そりゃ嘘じゃありませんわ。本当よ」

G「実際アルマンはあなたをお慕いしているんです……口にこそ出して言わないけれど。」

P「（低い声で） 二年前からあの人はあんたを思っているんですよ」

M「じゃあ、随分前からなのね」

P「去年、あんたが、お悪かった時分、バニエールへ湯治に行く前、三か月床に就いたっきりだったでしょう。あの時、若い方が、名を言わないで、毎日あんたの容態を聞きに来てたでしょう」

M「そうそう、あたし思い出した」

G「それがあの男ですよ」

M「まあ、嬉しい。（呼ぶ） アルマンさん」

A「え、何でございます」

M「今、何の話をしているかご存知？ あたしが病気の時、毎日お見舞いに来てくださったのですねえ」

A「ええ、参りました」

M「なんとお礼を申し上げます」

P「お料理が来たわ。じゃあ始めましょうよ。あたし、お腹が空いて耐えられないわ」

《プリュダンスによる独り芝居の終わり》